

【歴史研究】

兀庵普寧の来日をめぐって —南宋禅林における日中禅僧の交流—

舘 隆 志*

(日本 東洋大学)

はじめに

禅宗における中国と日本の交流は、南宋代に盛んになり、110年の間に100人以上の日本僧が中国に留学している [木宮 1955]。この中には、禅、天台、律、浄土といった諸宗の僧侶が含まれるが、人数として顕著なのは、禅と律であり、後世に与えた影響は圧倒的に禅宗が多であった。

宋朝の仏教を学ぼうと、多くの日本僧が海を越えて中国に渡った。しかし、後に一派を形成したのはほぼ禅宗の僧侶に限られている。これは、印可という禅宗独自のシステムによって、中国僧から直接その法脈を受け嗣ぐことができたためと考えられ、南宋禅林で禅を学び、印可証明を受けた禅僧たちは日本に帰ってから禅を布教した。

禅宗の場合、多くの中国僧が直接日本に来日し、主に鎌倉や京都の大刹で住持を勤めた。中国人の住持が、中国語（宋音）を用いながら、宋朝式の伽藍で、宋朝式の仏教儀礼を行なった¹。一方、南宋の律宗の将来は、長らく宋地で学んだ俊芿（1166-1227）を嚆矢とし、その門流を中心に後に多くの僧侶が海を渡った。そして、泉涌寺を中心として南宋仏教を展開した。ただし、鎌倉時代に律宗の中国僧が来日することはなかった。

この点が禅宗と律宗では根本的に異なっており、律宗の日本僧が中国僧に直接学ぶためには入宋する他はなかったが、禅宗の場合は日本にいな

*東洋大学東洋学研究所客員研究員・国際禅学研究所客員研究員

ら中国僧に直接指導を受けることが可能であった。禅宗では中国僧に学ぶために必ずしも中国への留学を必要としなかったのである。このことは、鎌倉時代の律宗の入宋僧が多い理由の一つでもあろう。すなわち、禅宗は日本における南宋仏教の再現においては、多くの中国禅僧の来日と、印可証明という独自のシステムを有していた点で、布教における優位性を持っていたことになる。

日本における南宋禅林からの僧は、蘭溪道隆（1213-1278）によって始まると言って良い²。その後、兀庵普寧（1198-1276）、大休正念（1215-1289）、無学祖元（1226-1286）と続いた。建長寺の開山となった蘭溪道隆や、円覚寺の開山となった無学祖元については多くの論考が見られるが、兀庵普寧、大休正念については、ほとんど手つかずの状態である³。

このうち、兀庵普寧の来日は、時の執権である北条時頼（1227-1263）に印可を与えるという、日本における禅の歴史展開を考える上で極めて重要な意味をもつにも拘わらず、これまで詳しく考察した研究は管見に触れない。そこで、本論にて兀庵普寧の来日について、日中禅僧の交流を踏まえながら論じることにした。

兀庵普寧来日をめぐる諸説

兀庵普寧の来日について、先行研究は以下のように述べている。

[林 1938]

「渡日の決心を与へるに最も力あったのは建長寺道隆」「蘭溪が随時渡日せんことを促した」「径山で同参の聖一が与つて力あったことも事実」「時頼が招聘状を出した」

[鷲尾 1942]

「法眷等の懇請により、大刹の住持を辞して遠く渡来した」「円爾の指示により鎌倉に下って建長寺に入った」

[玉村 1964]

「東福寺の円爾など、かつて径山の仏鑑禪師無準師範の会下に在った者が、同門の兀庵普寧を招請した」「円爾等の推挙により鎌倉に招かれ、また北条時頼の知る所となり、深く之に帰依することになる」

[荻須 1965]

「日本から招聘を受けたのは景定元年（一二六〇）であり、わが文応元年に來朝した。円爾・蘭溪等の道友に迎えられて、時頼に請ぜられて建長寺の第二世となった」

[今枝 1985]

「旧知の間柄であった蘭溪道隆や円爾などの招きをうけて來朝」

[葉貫 1993]

「時頼の招きに応じて來朝した」

[村井 1995]

「兀庵普寧が時頼」に招かれて來日

[西尾 1999]

「わが国の旧友は商船が中国に行くたびに兀庵のもとに招聘状を寄せ」

[竹貫 1999b]

「北条時頼の招き」「円爾や、蘭溪などに迎えられ」

[伊吹 2001]

「その渡來は、もともと同門の東福円爾の召請によるものであったらしい」

[市川 2002]

「象山靈巖寺にいたとき「北虜」すなわち蒙古の襲來に会い、たまたま旧知の日本人を通じて文応元年（1260）、商船に乗って博多に到着する。博多では聖福寺に仮錫し、のちに上京して東福寺の円爾弁円と相い会う」「北条時頼は兀庵の声望に接し、ぜひ鎌倉に迎えたいと願ひ、当時蘭溪が住持であった建長寺に仮遇させた」

以上であるが、そもそも兀庵普寧に関する詳しい論究がなく、また禅宗史を概観する中で述べられたものであるため、何に基づくものか不明の場合が多い。

このうち、[林 1938]に「時頼が招聘状を出した」とあるのは、『東巖

安禪師行実』に悟空敬念（1217-1272）の言葉として、「近兀庵和尚、赴太守崇公請、來朝住建長（近ごろ、兀庵和尚、太守崇公の請に赴き、來朝して建長に住す）」（続群9上・309）とあるのに基づく。また、同史料には「同年（正元元年、1259）兀庵和尚來朝。是即太守崇公、先見蘭溪和尚、染指於禪味、故志轉增進、如渴飲少塩水、重遣專師、尋訪明師、正信内發、正師來應、是和尚（同年兀庵和尚來朝す。是れ即ち太守崇公、先に蘭溪和尚に見みえ、指を禪味に染め、故に志を転じて増進す。渴きて少の塩水を飲むが如く、重ねて專師を遣わし、明師を尋訪す。正信を内發し、正師來たりて応ず、是れ和尚なり）」（続群9上・308）とも記されている。しかしながら、後年に編纂された『東巖安禪師行実』の内容には特に道隆と普寧に関する記事に恣意的な記述がみられ、年次的にも内容的にも矛盾がいくつか確認されるため⁴、この記事のみからこの説を導きだすのは問題がある。

兀庵普寧の來日理由が時頼の招聘か否かについては、鎌倉幕府に招聘された最初の中国僧が、兀庵普寧なのか、無学祖元なのかにつながる大きな問題である。すなわち、当時の日本の禪宗界が正式に中国禪僧を招聘するほどまでに成熟できていたか、という状況の判断に影響を与えるため、慎重に考察する必要があるだろう。

禪の将来と天童山・徑山への参学ルート

日本僧が南宋禪林を見聞したのは、平安末期から鎌倉初期の栄西（1141-1215）や覚阿（生没年不詳）を嚆矢とみることができる。栄西は一度目の入宋時には禪に触れたのみであったが、二度目の入宋時には本格的に参禅し、天童山の虚庵懷敏（生没年不詳）より印可を受けている。

覚阿は、靈隱寺の瞎堂慧遠（1103-1176）に参じてその法を嗣いでおり、『嘉泰普灯録』巻20（続蔵137・144a）に立伝されるほど評価は高い。しかしながら、禪の広まっていなかった当時の日本での布教には苦心したよ

うである。栄西は聖福寺・寿福寺・建仁寺の開山となり、天台・真言を合わせた形での布教を行ない⁵、覚阿にいたっては帰国後の活動がほとんど不明である。

ただし、栄西が帰国後に天童山の千仏閣を再建するため資材を送ったことは特筆すべきで、この事跡は^{ろうやく}楼鑰（1137-1213）の『^{こうきしゅう}攻媿集』巻57「記」「天童山千仏閣記」に記され、天童山では銘文が石碑に刻まれた。栄西の活動は、確実に天童山の中でその名を留めたことになる。

栄西の開山した寺院では、禪を学べる禪林としての性格を有していたようであり、栄西の高弟として明全（1184-1225）、参学門人として道元（1200-1253）を輩出した。明全と道元は貞応2年（1223）に入宋し、最初は景福律院に、まもなく天童山に入山した⁶。そして、天童山ではすでに隆禪という日本僧が留錫していた⁷。

天童山で道元が願う嗣書の閲覧をかなえた隆禪については、栄西法孫の隆禪⁸ではないかと考えられている。また、如浄下に在った五根房は栄西の門流であり⁹、隆禪・五根房・明全・道元という4名¹⁰がこの頃の天童山に滞在していることになる。このことから、天童山は初期の栄西門流における主要な留学先になっていたと考えられよう。

明全は天童山にそのまま留まること三年にして宋地で客死した。この間、道元は「正師」を求め阿育王山広利寺、径山万寿寺など諸山を歴遊するが¹¹、最終的に天童山景德寺に戻り、そこで住持となっていた曹洞宗の如浄（1162-1227）に参学し、印可を受けて帰国し、その法を日本に伝えた。

その後、栄西門流の栄朝（1165-1247）に学んだ円爾（1202-1280）が嘉禎元年（1235）に入宋する。円爾は景福律院に入った後、すぐに、天童山に行つて癡絶道冲（1169-1250）に参じ、上天竺寺（天台宗）の栢庭善月（1149-1241）、浄慈寺の笑翁妙堪（1177-1248）、霊隠寺の石田法薫（1171-1145）に参ずる。霊隠寺で知客を勤めていた退耕徳寧（生没年不詳）の勧めで、径山万寿寺の無準師範（1177-1249）に参じ、その法を嗣いだ。仁

治2年(1241)に帰国し、後に京都東福寺の開山となっている。

円爾も明全や道元と同様に、入宋して景福律院に行き、天童山に入山するという参学ルートを踏襲しているように思われる¹²。恐らくは、栄西によって開かれ、その門流で継承されたものであろう。しかしながら、円爾以降は、径山への参学ルートが切り開かれたようで、径山への参学僧が多くなる。

円爾とともに入山した神子栄尊(1195-1272)は別としても¹³、円爾と径山で交流していた随乗湛慧(生没年不詳)¹⁴、円爾よりも少し後の妙見道祐(1201-1256)が径山の師範に参じた¹⁵。この他、師範の法を嗣いだ性才法心(生没年不詳)も径山に参学し¹⁶、寛元2年(1244)に一翁院豪(1210-1281)が径山の師範に参じている¹⁷。心地覚心(1207-1298)も建長元年(1249)に覚儀と観明を伴って入宋し¹⁸、補陀山を拜した後、径山に行き癡絶道冲に参じている¹⁹。

その後、円爾の門弟の入宋が続き、主立った僧だけでも、悟空敬念(1217-1272)²⁰、無関普門(1212-1291)²¹、無象静照(1234-1306)²²、無修円証(生没年不詳)²³、蔵山順空(1233-1308)²⁴、山叟恵雲(1227-1301)²⁵、無伝聖伝(生没年不詳)²⁶、白雲慧暁(1223-1297)²⁷、無外爾然(生没年不詳)²⁸などが入宋した。

もちろん、径山だけではなく他の寺院にも参学しているが、師範法嗣の西巖了恵(1198-1262)・退耕徳寧などへも参学していることは注目される。また、円爾の門弟だけでも、荆叟如珏、断橋妙倫、希叟紹曇などに日本僧が集まっている様子が確認できる²⁹。入宋を志す、入宋した僧侶たちの間で、中国禅僧たちの情報が共有されていたのであろう。あるいは、このような中国における参学ルートの情報を求めて、円爾の門流に修行僧が集まるようなこともあったであろう。

少なくとも円爾の門弟の参学ルートは、円爾によって切り開かれたものが基本となり、その後も宋地において開拓されていたと考えて問題なかろう。そして、これら日本僧の南宋禅林における活動は、後に日本にやって

くる禅僧にも影響を与えることとなった。

最初の来日僧

最初に南宋禅林から来日した禅僧は蘭溪道隆である。道隆は廬山（江西省）や蘇州（江蘇省）、都の杭州（浙江省）などで、無明慧性（1160-1237）・無準師範・癡絶道冲・北礪居簡（1164-1246）に参禅し、無明慧性の法を嗣いだ僧侶である〔館 2014b〕。その後、南宋淳祐元年（1241）に天童山に入る。

この際、蘭溪道隆は、日本で禅がいまだに弘まっていなかった状況を知り、日本に渡って禅を弘めようと決意したという。『元亨釈書』巻六「釈道隆」に「嘗聴東僧之盛称国光及禅門之草昧常志游化（嘗つて東僧の盛に国光及び禅門の草昧なることを称するを聴き常に游化を志）」（大日仏 101・210）したとあり、また「我為法跨海入此国（我れ法の為めに海を跨え此の国に入る）」（大日仏 101・211）とも述べている。

すなわち、来日のきっかけとなったのは、南宋禅林における道隆と日本僧との交流であり、発心して自発的に日本にやってきた僧侶と言える。

道隆が天童山に入山した際、ともに入山したのが日本僧の塩田和尚（生没年不詳）である。そして、ほかにも「仙」「国」「覚妙房」という3名の日本僧がいたらしい。道隆は、天童山で「覚妙房」が示した道元の法語と偈頌を閲覧し、感銘を受けたことを後に道元宛の書状にしたためている³⁰。中国に留学しようとする「覚妙房」は、留学前に入宋経験のある道元から情報を集め、来日を志した道隆は、日本僧から情報を得ようとしていたのではないだろうか。

道隆と塩田和尚の2僧は南宋淳祐6年（1246）に天童山をともに出て、同じ船にて日本に向かうことになった。道隆は、塩田和尚という人的縁故を南宋禅林で得ていたのであり、塩田和尚は道隆の来日の道先案内人ともなり、2僧の交流は、1260年代の記録まで見ることができる〔館 2016a〕。

蘭溪道隆に同行した弟子として義翁紹仁（1217-1281）、龍江応宣（生没年不詳）、徳智³¹などがあり、少なくとも4名の中国僧の集団であり³²、中国語も話せる塩田和尚が案内したのであろう。

最初は博多の円覚寺、次いで京都の泉涌寺来迎院、次いで鎌倉寿福寺に移る。博多の円覚寺の詳細は不明ではあるが、博多には宋人街があり、また、中国語を話せる人々が周りにいたことであろう。律院である泉涌寺来迎院の住持は、入宋経験のある月翁智鏡（生没年不詳）であり、宋地で道隆と交流があったことから³³、泉涌寺来迎院が道隆の京都での滞在先となった³⁴。鎌倉の寿福寺の住持は、入宋経験のある栄西法孫の大喝了心（生没年不詳）であった。道隆の滞在先には、中国語しか話せない集団であっても、どうにかなるような環境が整えられているように思われる。

この間、道隆は来日直後の円覚寺から永平寺の道元に書状を出した。南宋禅林で得た情報をもとに道元と交流を計ろうとしたのである。一方、道元は時頼と檀越の波多野義重による招聘により、宝治元年（1247）8月3日に永平寺を出発し、鎌倉に半年ほど滞在した後、宝治2年の3月13日には永平寺に戻っているが³⁵、この鎌倉滞在中に京都に滞在する道隆に返信している³⁶。両者は地理的な問題から直接顔を合わせる機会はなかったが、道隆がわずかながらの縁をたよりに交流を願っていた様子が伝わってくる。

鎌倉では執権北条時頼によって迎えられ、常楽寺の住持となった後、建長寺の開山となった。建長寺は中国の禅寺を模した建築であり、そこで行なわれた修行生活は「唐式に依りて行持」（蘭溪全1・10b）され、經典の諷経を「唐様に挙唱」（禅墨拾日・28）した中国式のもので、説法も法要も中国語で行なわれた。その様は、鎌倉後期の禅僧である無住道暁（1226-1312）によって「唐国の如し」³⁷と記され、日本の禅はこのときから弘まりはじめたと、伝えられている³⁸。

道隆の建長寺における活動を助けた一人が円爾である。円爾から始まったとみられる両者の書状のやりとりをはじめとして³⁹、道隆の建長寺開堂

時には円爾は10人の弟子を派遣して補佐させたという⁴⁰。

円爾の書状によれば、2人は同時期に径山で修行した間がらであるが、修行僧があまりにも多かったため、顔を合わせてはいても、話をする機会はほとんどなかったようである⁴¹。いずれにしても、両者の交流は、その後もしばらくは続いた⁴²。茶や筍が送られたことも記録されており⁴³、当時の住持の間で行なわれた文物のやりとりをも知ることができる。

兀庵普寧の来日

兀庵普寧は、中国の西蜀（四川省）の人で、幼年にして出家し、唯識を学ぶも、数年にして捨て去り、諸老を歴参し⁴⁴、建康（南京市）の蔣山の痴絶道冲、四明（浙江省）の阿育王山の無準師範に参じ、無準師範が径山に移るとこれに随侍し、無準師範より兀庵の二字を得て、これを道号とした。径山の無準師範の法を嗣いだのち、象山（浙江省）靈巖寺の住持を勤め、無錫（江蘇省）南禅寺に移り6年間住持を勤めている。

このように、すでに宋地で住持を勤めていた普寧は、如何なる経緯で来日することになったのであろうか。

まず、『兀庵和尚語録』に記された情報から追ってみたい。兀庵普寧の語録は、卷上に「慶元府象山靈巖広福禅院語録」「常州無錫南禅福聖禅寺語録」、卷中に、「巨福山建長興国禅寺語録」「婺州雲黄山宝林禅寺語録」、卷下に「法語」「序跋」「仏祖賛」「自讃」「偈頌」「小仏事」「跋」で構成されている。

このうち、上卷末には、「無錫南禅寺語録」の「退院上堂」に続いて、普寧が日本に到着してからのことが挿入されている。その冒頭には、

師、因日域法眷・道旧郷人、不忘径山道聚之義、屢邀閑楽、累却復至。於景定庚申、暫与一遊。（続蔵 123・4d）

[訓] 師、日域の法眷・道旧の郷人、径山道聚の義を忘れざるに因み、屢ししば

ば閑かな楽しみを邀かえ、累りに却ぞけるも復た至る。景定の庚申に於いて、暫らく与に一遊す。

とある。この部分は侍者の記した部分であるが、「日域法眷」は日本僧の円爾のこと、「道旧郷人」は普寧と同じく蜀出身の蘭溪道隆のことである。この2人が普寧とのそれぞれの「径山道聚之義」⁴⁵を忘れなかったために、使者（使僧）と書状を出していたらしく、ゆえに南宋景定元年（1260）に来日したことを記している。

この点、『兀庵和尚語録』巻中「建長寺語録」の「国公就本寺、満散祈祷道場、礼請普説」で、普寧の言葉として、

適因法眷・道旧、不忘之義、屢承之約、累却復至。以故、撤去寺事、暫乘良便、越漠觀国之光、先承国公殿、特垂降接、一見如故（続藏 123・10a）
[訓] 適たま法眷・道旧、之の義を忘れざるに因み、屢しば之の約を承わり、累りに却けるも復た至る。故を以て、寺の事を撤去し、暫らく良便に乗り、漠を越え国の光を観る。先ず承わるに、国公殿、特に降接を垂れ、一見すること故の如し

が記録されているので、これを踏まえたものであろう。また、「屢邀閑楽、累却復至」や「屢承之約、累却復至」という表現からは、日本から何度も使者（使僧）と書状による招聘が来ていたらしい。そして、普寧は来日してから時頼（国公殿）による特別の礼節を受けたことになる。

日本から普寧に宛てた書状については伝存するものはないが、円爾は帰国後も径山の師範に何度も書状を送っていた⁴⁶。また、径山に災が有ったと聞けば、千枚の木材を日本から寄進させている⁴⁷。これらの師範宛の書状は、入宋した円爾の門弟たちによって届けられ、その返信は帰国する日本僧たちの手によるものであった。

そのため、残された史料からは、使者（使僧）は師範だけではなく普寧

のもとにも訪れ、手紙を届けていたと考えるのが自然である⁴⁸。普寧が円爾を前にして述べた「屢邀閑樂、累却復至」との言葉はこのことを指していると思われる。そして、師範示寂後もこの交流は継続されていたのだろう⁴⁹。

兀庵普寧は来日してすぐに、法眷である円爾の住持する博多の聖福寺で行なわれていた7月5日の榮西忌⁵⁰に因んで陞座説法を行ない、ついで東福寺においても陞座説法している。この際の上堂に、

堂頭法兄、不忘徑山師席義聚、屢承之約、正為提持窳惰、暫導來誠。越漠觀国之光、即回旧隱畢、殘既乍到此。(統藏 123・5a)

[訓] 堂頭法兄、徑山の師席にて義聚し、屢しば之の約を承るを忘れず、正に為に提持するも窳^ゆ惰^だす。暫らくして誠^{いまし}め導^いびき来たり、漠を越え国の光を觀て、即ち旧隱を回^{たちま}りて殘を畢え、既に^{こゝ}乍^{いた}ち此に到る。

とあり、円爾と「徑山の師席にて義聚」し、「約」を承っていたと述べている。その「約」によって来日しているので、「約」は普寧の来日の約束であったと判断されよう。さらに、円爾から「誠」が届いたので、日本に來たと述べている。円爾の使者（使僧）が日本からやってきて、普寧のもとに手紙を届けたのである。

普寧は聖福寺では請われて陞座しているが、そこで「適値聖福法兄」(統藏 123・4d)と述べている。しかし、恐らくは「適^{たま}」たまではない。円爾はその一時期だけ東福寺を空けて博多まで行き、聖福寺の住持を勤めて普寧の到着を待っていたと判断される⁵¹。普寧からすれば「適」たまであったのかもしれないが、日本側では普寧を迎えるための万全の準備がなされていたのである。

したがって、この来日は事前に日本の円爾や道隆、あるいは鎌倉に知らされていたことになる。その後、円爾は普寧を東福寺まで案内する。

そして、後述するように、徑山で普寧と「執別」（手を握って別れる）

した道隆と、新たなる南宋禅者の鎌倉への招聘を願っていた時頼が、円爾の背後にあったために鎌倉への招聘が成し遂げられたのであろう。この東福寺滞在時に、「関東部徒」が迎えにやってきて、普寧はそのまま鎌倉の建長寺に入っているの、その行動は鎌倉に逐一伝えられていたと考えられ、来日以降に関しては、時頼を含めた形で受け入れ体制が整えられていたのであろう。

建長寺に入った際は、北条時頼に迎えられているが、時頼は普寧に対し焼香礼拝し、進み出してから、

弟子在大宋、曾礼拝和尚。今者多幸、再拜慈顔〈見其語異〉。(続蔵 123・5b)

[訓] 弟子、大宋に在りて、曾つて和尚を礼拝す。今は多幸にして、再び慈顔を拝す〈其の語異なるを見る〉。

と話しかけた。その後続く問答で、時頼が夢の中で和尚に参禅したが、夢に見た姿と実際に会った姿がまったく同じであったと述べているので、「再拜慈顔」とはこのことを指している⁵²。

そして、「見其語異」とあるから、時頼はこの質問を日本語でしたのであり、両者の問答には通訳がいたことになるだろう。時頼は道隆に長年参じていたが、中国語は話せなかったことになる。普寧は拳を握ってから、「吾雖年老、拳頭硬在(吾年老なると雖も、拳頭硬きこと在り)」と返答するが、通訳を介していても、普寧には時頼の話は意味が分からなかったに違いない。

そして、時頼は再び進み出て、「弟子兩年前、曾夢見和尚頂相、教訓参禅、惺後親絵供養。此者獲拜慈相、与夢見一同、喜悦之至(弟子兩年前、曾つて夢に和尚の頂相を見て、教訓参禅す。惺めて後ち絵を親しくして供養す。此の者、慈相を拜する獲て、夢と見ると一つに同じにして、喜悦の至りなり)」と具体的に解説するが⁵³、普寧は「且莫説夢(且らく夢を説

くこと莫かれ)」と話すのみであった。時頼はさらに、「和尚尊年多少（和尚、尊年多少ぞ）」と質問し、普寧は「六十三」と答えたものの、時頼の「弟子不問這箇年（弟子、這箇の年を問わず）」との返答に、拳を堅く握ってから「莫是這箇年麼（是れ這箇の年なること莫きや）」と問い返した。

これに対し、時頼が何も言うことができなかつたので、普寧は拳で時頼を三度ぶん殴ったところ、時頼は「蒙和尚教打、懽喜無量（和尚の教打を蒙り、懽喜無量なり）」と感激することしきりであった。このような経緯から、時頼はすぐさま普寧のファンになってしまったようである⁵⁴。また住持の道隆は、普寧の到着に因み「兀庵和尚至上堂」（蘭溪全 1・53b）を行なっている。

その後、道隆の住持する建長寺にありながら、請われて説法する機会があり、

在衆時、曾同蘭溪、聚首於蔣山。徑山千百衆中、雖各究明躬大事時、復以此道切瑳琢磨。執別而來、各天一涯。伏聞航海東來、際遇王公大人、信向仏法、留心此道、不忘悲願、同心同力、剏新宝所、日域魁為第一甲刹、与宋朝第一徑山、無有異矣。数年前屢承之約、累却復至。以故撤去寺事、越漠乍到。乃荷遠迓之礼、伏承謙冲領大衆、奉上命請為衆普説。不容堅辞。（続蔵 123・6b）

[訓] 衆に在りし時、曾つて蘭溪と共に、首を蔣山に聚つむ。徑山千百衆中、各おの躬の大事を究明する時なりと雖も、復た此の道を以て切瑳琢磨す。執別して而來、各おの天一涯なり。伏して聞くに、「航海して東來し、王公大人に際遇し、仏法を信向し、心に此の道を留め、悲願を忘れず、同心同力し、新たに宝所を剏む、日域の魁にして第一甲刹なり。宋朝第一の徑山と、異なり有ること無し」と。数年前、屢しば之の約を承り、累しば却き復た至たる。故を以て寺の事を撤去し、漠を越え乍ち到る。乃ち遠迓の礼を荷ない、伏して謙冲に大衆を領すことを承りて、命を奉上し衆の為に普説せんことを請わる。堅く辞すも容れず。

と述べている。道隆と普寧は、蔣山（江蘇省）の癡絶道冲の会下と、径山の無準師範の会下で共に修行していたが、手を握って別れて以来は別々の道歩んでいた。

その後、道隆が日本から手紙を出したようで、手紙で「王公大人」すなわち時頼が仏法を信仰し、建長寺が「宋朝第一径山」と異なることが無いとの情報を道隆が普寧に伝えており、「数年前屢承之約、累却復至」との表現からは、道隆も数年前から何度も来日を促す手紙を出していたようである。ただし、この時の径山の修行僧は普寧の言葉を借りれば「千百衆」であるのに対し、建長寺は200人ほどであったので〔舘2014b〕、規模とすればかなりの差があったようだ。

北条時頼は、入宋僧の道元を、次いで来日僧の道隆を鎌倉に招いてから、南宋禅林に強い興味をもったようであり、南宋禅林に道隆を通じてたびたび使者を出しており、あるいは法語を得ようとし⁵⁵、あるいは来日を要請していたようである。

たとえば、入宋僧の無象静照（1234-1306）が径山の石溪心月（?-1255）の会下にいた時、時頼から石溪心月への書状が届いているが⁵⁶、あるいは、これは招聘を願うものでもあったらしい⁵⁷。後に来日することになった大休正念も偶然その場に居合わせていたようだ。

これが事実であるならば、時頼は新たなる南宋禅者の来日をおかねてから強く望んでいたことになろう。そして、「一善知識」を夢に見た時から、より強く新たなる南宋禅者の来日を望むようになったのではないか。

道隆と円爾の交流が、道隆の建長寺開山の頃から始まっていたことは前述した通りである。さらに普寧は、円爾が九州に迎えに行き、時頼の部下が東福寺に迎えに行き、そのまま道隆の住持する建長寺に案内されている。この点を踏まえるならば、普寧の招聘において、2僧は協力関係にあったと考えられる。そして、普寧の来日以降に関しては、時頼を含めた形で、万全の体制が整えられていたのではなかろうか。

以上のことから、普寧の来日は時頼の意向を反映したものではあるが、

時頼による直接的な招聘と理解するのは難しいのではないか。時頼による徑山の石溪心月への招聘失敗を踏まえた上で、時頼からの新たなる南宋禪者を招聘したいという願いはあり得るが、『兀庵和尚語録』の内容からすれば、普寧の来日はあくまで時頼の意を汲んだ円爾や道隆によって成し遂げられたと理解されるべきである。したがって、普寧は時頼からの正式な招聘状によって来日したのではないと判断したい。

その後、弘長2年(1262)、普寧が建長寺の第二世となり、道隆が京都の建仁寺に移った。普寧は時頼から住持となることを請われた際には何度も断り、最終的には十五偈を添えて断った。しかしその後も時頼は諦めることができず、恐らくは時頼の意向により道隆が建仁寺の住持として京都に移ることとなり、最終的に断りきれなくなったのである⁵⁸。そしてこの状況は、普寧が時頼の招聘で来日していないことをも示唆している。

ちなみに、普寧は道隆に代わって建長寺に住持した当初、修行僧に対して「語音未辨」ゆえに「説者聴者難復難」(続蔵 123・9a)と述べ、その苦勞を説法にて述べている⁵⁹。

また、この年の10月16日に普寧は北条時頼に印可している(「最明寺殿契悟因縁」続蔵 123・12a)。禪が未だ根付いていなかった日本において、執権という鎌倉政権の中樞の人物が禪による印可を受けたのである⁶⁰。これは、日本禪宗史上、画期的な出来事であったと言ってもよいだろう⁶¹。

しかしながら、翌年(1263)11月22日に北条時頼が逝去し、時頼の死後、普寧は帰国の意を持つようになったらしく、建長寺を退院した後、文永2年(1265)に帰国した。帰国の後、婺州(浙江省)義烏県の雲黄山宝林寺(双林寺)や、温州(浙江省)永嘉県の江心山龍翔寺で住持を勤めているが、帰国後の兀庵普寧の行実はほとんど知られておらず、至元13年(1276)11月24日に示寂した。弟子は、南洲宏海(?-1303)、東巖惠安(1225-1277)、大夢祖意(生没年不詳)、景用が知られ、宗覚禪師と勅諡されたという⁶²。

おわりに

南宋の時代、多くの日本僧が禅宗という仏教宗派の教えを求めて大陸に旅立った。初期の日本僧たちは、先人たちの参学行程に沿った形で留学をしているように思われる。入宋を志す僧侶たちは、ある程度の情報を共有していたのだろう。当初は、榮西によって天童山への参学ルートが開かれ、次いで円爾によって径山への参学ルートが開かれたのではなかろうか。

そうして、入宋僧たちによって、南宋禅林で中国僧と日本僧との間に交流を生むことになり、その中から日本に行って禅を布教しようと志すものが現れた、蘭溪道隆である。その来日は、南宋禅林でわずかながら生まれた交流をたよりに行なわれたのである。

南宋禅林で生まれた日中禅僧の交流は、日本においても継続された。道隆と円爾との交流は、中国ではほとんど会話したことがなかったのであるが、建長寺建立と時頼という結末点を得ることで密な交流を生じさせることとなった。

その後、南宋景定元年（1260）に兀庵普寧が来日するが、その招聘は、南宋禅林を思慕する時頼の意向を反映したものであり、来日僧の道隆、入宋僧の円爾の協力によって行なわれた。そして普寧は、「径山師席義聚」、「径山道聚之義」を重んじ来日したのである。以上の点から、普寧の来日は、時頼による直接的な招聘ではなかったと理解し、鎌倉幕府から直接招聘された最初の中国禅僧は無学祖元であったと結論づけたい⁶³。

この招聘によって、時頼は普寧から印可証明を受けた。文永2年、普寧は帰国してしまいが、わずか6年という滞在期間でありながらも、時の為政者たる時頼が禅の印可証明を受けたことは、禅の日本の普及にとって極めて大きな出来事となった。

その後、日本は大休正念、無学祖元などの禅僧が来日し、日本で南宋禅林を再現しながら、禅を普及する時代が到来することになる。そのきっか

けは、南宋禅林を舞台とした日中禅僧の交流であったのである。

ただし、普寧の帰国に際して、『元亨釈書』巻6「釈普寧」で虎関師錬は「然遇六群之猖獗作一錫之返飛」（大日仏 101・213）と賛しているが、普寧が来日して以降の布教活動は決して平坦なものではなかった。禅宗草創期、入宋僧の栄西や道元、来日僧の蘭溪道隆が苦心しながら布教したように⁶⁴、普寧もまた禅宗草創期の僧侶として苦心したのである。

道隆滅後に来日した無学祖元の頃、禅僧たちが比較的安定して日本で布教できるようになるが、それまでは、多くの困難のもとに布教が行なわれていた。普寧の来日は、まさにこのような禅宗草創期の困難の時期に、日中禅僧の交流によって成し遂げられたのであった。

（補記）本論は2017年11月10日に中国浙江省杭州の陸羽山荘で行なわれた「径山中国禅宗祖庭文化論壇」における口頭発表「兀庵普寧の赴日与中日禅僧之間の交流」を、大幅に補訂を加え、日本語に直したものである。

【参考文献】

- 林岱雲『日本禅宗史』、大東出版社、1938
鷲尾順敬『鎌倉武士と禅』、大東出版社、1942
木宮泰彦『日華文化交流史』、富山房、1955
玉村竹二『円覚寺史』、春秋社、1964
荻須純道『日本中世禅宗史』、木耳社、1965
原田弘道「道元禅師と金剛三昧院隆禅」、『印度学仏教学研究』23-1、1974
入矢義高「寂室—高潔の禅者」、『寂室』日本の禅語録巻十、講談社、1979
今枝愛真「円爾と蘭溪道隆の交渉—往復書簡を通して見たる—考察」『禅宗の諸問題』、雄山閣、1979
今枝愛真「兀庵普寧」『国史大辞典』、吉川弘文館、1985
中尾良信「金剛三昧院隆禅について」、『印度学仏教学研究』36-2、1988
葉貫磨哉『中世禅林成立史の研究』、吉川弘文館、1993
村井章介「渡来僧の世紀」、『東アジア往還』朝日新聞社、1995
西尾賢隆『中世の日中交流と禅宗』、吉川弘文館、1999

- 竹貫元勝「無学祖元と兀庵普寧」、『禅文化』172、1999 [竹貫 1999a]
- 竹貫元勝『新日本禅宗史一時の権力者と禅僧たち』、禅文化研究所、1999 [竹貫 1999b]
- 伊吹敦『禅の歴史』、法蔵館、2001
- 市川浩史「兀庵普寧」、『吾妻鏡の思想史—北条時頼を読む』、吉川弘文館、2002
- 榎本涉「中世の日本僧と中国語」『歴史と地理』567、山川出版社、2003
- 榎本涉「『板渡の墨蹟』と日宋貿易」、四日市康博編著『モノから見た海域アジア史』、九州大学出版会、2008
- 榎本涉『僧侶と海商たちの東シナ海』、講談社選書メチエ、2010
- 榎本涉『南宋・元代日中渡航僧伝記集成』、勉誠出版、2013
- 館隆志「『大覚禅師語録』の上堂年時考—特に兀庵普寧の来朝年時を中心に」『駒沢史学』66、2006
- 館隆志「栄西の入滅とその周辺」『駒沢大学禅研究所年報』21、2009
- 館隆志「兀庵普寧に参じた尼僧をめぐる」『アジア遊学』122、2009
- 館隆志「鎌倉期の禅林における中国語と日本語」『駒沢大学仏教学部論集』45、2014 [2014a]
- 館隆志「建長寺の開山—蘭溪道隆と北条時頼—」、村井章介編『東アジアのなかの建長寺』勉誠出版、2014 [2014b]
- 館隆志「樵谷惟僊と塩田和尚に関する考察—信州塩田安楽寺の開山をめぐる」『駒沢大学禅研究所年報』28、[館 2016a]
- 館隆志「日本禅宗史における蘭溪道隆の位置づけ」、高井正俊編『建長寺—そのすべて』、鎌倉春秋社、2016 [館 2016b]

本論における主立った史料の略称は、大正新脩大蔵経＝大正蔵、卍続蔵経＝続蔵、大日本仏教全書＝大日仏、禅林墨蹟拾遺（思文閣出版）＝禅墨拾、雑談集（三弥井出版）＝雑談集、五山文学全集＝五山全、五山文学新集＝五山新、蘭溪道隆禅師全集＝蘭溪全、道元禅師全集（全七巻、春秋社）＝道元全、諸本対校建搨記＝建搨記、続群書類従＝続群。

【註】

- 1 この点に触れた論考として、[入矢 1979] [村井 1995] [榎本 2003] [館 2014] がある。
- 2 入宋僧の道元に随侍して来日した寂円（1207-1299）は、若くして来日し、道元に出家したとされているため、南僧禅林からの来日僧とは言えない。

- 3 兀庵普寧をめぐる論考としては、[竹貫 1999] [市川 2002] [館 2006] [館 2009] などがあるが、十分な考察が行なわれているとはいいがたい。
- 4 たとえば、兀庵普寧の来日年時が、本来は兀庵普寧は文応元年（1260）の来日であるはずが、正元元年（1259）と記されてるなどの一年ずれが見られ [館 2006]、それ以外にも問題のある記事が散見される。
- 5 『興禅護国論』巻下「第八禅宗支目門」には、「八、真言院行事。謂常修水陸供（冥道供也）。施主為祈福、為功德、為亡者修之。九、止観院行事。謂修法華三昧・弥陀三昧・観音三昧等也」（大正蔵 80・15a）とあり、禅院の行事の中に真言院と止観院に関する規則が記載されている。
- 6 道元の伝記史料や著述には、道元が寧波に到着し、その後、天童山に上山するまでの期間についての記述とすれば、『典座教訓』に5月4日に寧波の船中にいることを記すのみである（道元全 6・12）。明全については、景福律院に行き、その後、天童山に入山したことを道元が「明全和尚戒牒奥書」に「己入唐、投天童山入了然寮」、「初到明州景福寺」（道元全 7・234）と記している。入宋直後の道元は、明全とともに行動していたと判断されるため、道元も景福律院に行ったと考えるのが自然である。道元が具足戒の戒牒を持たなかったため、道元のみが上陸できずに船中にいたする説があるが、そのようなことを記している史料は一つも存しないため、本論ではこの説は採らない。
- 7 『正法眼蔵』「嗣書」に「嘉定のはしめに隆禅上座日本人なりといへども、かの伝蔵主病しけるに、隆禅よく伝蔵主を看病しけるに、勤勞しきりなるによりて、看病の勞を謝せんがために、嗣書をとりいだして礼拝せしめけり。見がたきものなり、与你礼拝といひけり。それよりこのかた、八年のち、嘉定十六年癸未あきのころ、道元はじめて天童山に寓居するに、隆禅上座ねんごろに伝蔵主に請して、嗣書を道元にみせし」（道元全 1・429）とある。
- 8 隆禅については、[原田 1974] [中尾 1974] を参照。道元の著述に見られる隆禅が、金剛三昧院の隆禅であるかについて、現状の史料では確定には至らないが、その可能性は十分に考慮しなければならない。
- 9 『正法眼蔵随聞記』巻 2 に「一門の同学五根房、故用祥僧正の弟子也」（道元全 7・65）とある。
- 10 面山瑞方（1683-1769）の『訂補建搨記』には、正徳 3 年（1713）に永平寺が焼失するまで伝わっていたとされる「建仁寺住侶、明全、道元、廓然、

亮照等、為渡海下向西海。路次関関泊泊、無其煩、可有勘過之状、如件。武藏守判。貞応二年二月二十一日、相模守判」(諸本建斯・141)という文書が収録されている。この場合は、廓然、亮照を合わせて6人ということになる。

- 11 道元の在宋中のおもな参学寺院は、景福律院、天童山景德寺、阿育王山弘利寺、径山万寿寺、天台山万年寺、大梅山護聖寺である。
- 12 [榎本 2010] では、円爾の初期の参学行程について、「最初に尋ねた明州の景福寺・天童寺は、これ以前に榮西一門の明全も尋ねたところだから、榮西一門のお決まりのコースだったのだろう（特に天童寺は榮西が千仏閣造営の材木を送ったという因縁がある）」と指摘している。
- 13 『聖一国師年譜』仁治2年条に「肥州水上有榮尊〈覺禪房、号神子〉、持律行道、世所称也。昔与師偕或在長樂、或入宋国、然尊經三年而帰」(大日仏 95・134) とある。
- 14 『聖一国師年譜』仁治2年条に「宰府有湛慧〈隨乗房〉、性鯁直。出言多異。殆類散聖精顯密二教、且復入宋、受仏鑑法」(大日仏 95・134) とある。
- 15 『東巖安禪師行実』に「適有日本道祐、亦是郷人同性也。先受径山印記」(続群 9 上・305) とある。また、『聖一国師年譜』仁治2年条の師範からの手紙に、「祐音二兄此在」(大日仏 95・135) とあるのが道祐と考えられている。
- 16 『元亨釈書』巻 6「釈法心」に「駕商舶入臨安、径上径山、見仏鑑禪師」(大日仏 101・208) とある。
- 17 『仏光国師語録』巻 9「拾遺雜録」の「長樂一翁長老書」に「院豪昔年参礼大宋径山無準老師」(大正蔵 80・231a) とある。
- 18 『法灯円明国師行実年譜』建長元年条に「先礼補陀、次到長津上岸焉、覚儀・観明等、结伴頂包行脚、初陟径山、参住癡絶和尚」(続群 9 上・351) とある。
- 19 心地覚心は、径山の癡絶道冲、湖州道場の荆叟如珏、臨安府護国仁王禪寺の無門慧開に学んだ。『法灯円明国師行実年譜』(続群 9 上・351) による。
- 20 悟空敬念は、径山の無準師範に参じた。『東巖安禪師行実』(続群 9 上・305) による。
- 21 無関普門は、靈隠寺の荆叟如珏、断橋妙倫に学んだ。『大明国師無関和尚塔銘』(続群 9 上・330) による。
- 22 無象静照は、径山の石溪心月、阿育王山の虚堂智愚に参じ、虚堂智愚に従つ

- て柏巖慧照寺、浄慈寺に参学した。『無象和尚行状記』（続群 9 上・367）による。
- 23 無修円証は、天台山国清寺の断橋妙倫、天童山の西巖了恵に学んだ。『西巖和尚語録』巻 2「法語」に「日本証上人、以断橋法語求印証」（続蔵 122・178a）とある。また、『済北集』「仏国寺祭証無修」（五山全 1・198-199）に「当炎宋之明運、凌洪浪之浩滔」とあり、円爾の法嗣に無修円証が名を連ねていることから、円爾の法を嗣いだ無修円証が「日本証上人」と考えられている。[木宮 1995] 参照。
- 24 蔵山順空は、径山の偃溪広聞、靈隠寺の荊叟如珏と淮海元肇、越州東山の断溪妙用、万寿寺の退耕徳寧、天童山の西巖了恵、思溪の石林行輩に学んだ。『元亨釈書』巻 8「釈順空」（大日仏 101・235）による。
- 25 山叟恵雲は、浄慈寺の断橋妙倫に学んだ。『仏智禪師伝』（続群 9 上・364）による。
- 26 無伝聖伝は、径山の荊叟如珏に学んだ。『聖一国師年譜』弘安三年条の割註に、「無伝、名聖伝。入宋嗣径山珏荆叟」（大日仏 95・146）とある。
- 27 白雲慧暎は、台州瑞巖寺の希叟紹曇に学んだ。『仏照禪師塔銘』（続群 9 上・362）による。
- 28 無外爾然は、明州雪竇の希叟紹曇、径山の無準師範に学んだ。『聖一国師年譜』「無外爾然、雒城人、入宋訪尋知識」（大日仏 95・146）とあり、『仏鑑禪師語録』巻 3「法語」「示日本然上人」（続蔵 121・459c）、『希叟和尚広録』巻 6「頌」「日本然上人」（続蔵 122・153b）がある。また、『仏照禪師語録』上巻「東福寺語録」「謝実相長老上堂」に「昔年共看大洋月」（大正蔵 80・31c）とあり、三河実相寺の無外爾然は、白雲恵暎と同じ頃入宋したらしい。[木宮 1995] 参照。
- 29 日本人が留学先の禪寺に行き、すぐさま中国禪院五山の住持に相見している例が多々あるが、日本の来日僧や入宋僧からの紹介状を持していなければ、恐らくは難しいことであろう。『希叟和尚語録』巻 1「法語」「日本温英二禪人、持建長蘭溪和尚書、与平元帥求語」（続蔵 122・89a）からすれば、時頼の求めに応じて、法語を得るために「建長蘭溪和尚書」を持して門弟 2 人が希叟紹曇に参じているが、これが紹介状に当たるものであろう。このように、入宋僧たちは、わずかな縁を繋ぎながら参学ルートと参学先を確保していったのだろう。
- 30 『建搨記』「道元宛蘭溪道隆書状」（諸本建搨・64-65）。本書状の詳細な訓註

- については、[館 2016a] 参照。
- 31 『蘭溪和尚語録』 巻下「小仏事」「為徳智小師秉炬」に「有智無智惟已自知、内空外空豈假他力。昔年恁麼来、扶桑無地著屍骸。今日恁麼去、唐朝不是汝婦処（後略）」（蘭溪全 1・153b）とある。徳智は「昔年」に若くして来日し、若くして亡くなった僧である。状況からすれば、おそらくは道隆らとともに来日したのであろう。
- 32 『鏡堂和尚語録』 巻 2「法語」の「示法平都聞」に、「平都聞、不憚鯨波之險、隨侍建長和尚而来此、同住一夏。觀其語默動靜、誠有大過人者。他日異時、必能為建長和尚、出一口气在。夏罷、因婦侍建長、袖紙需語」（五山新 6・475-476）とあるに因んで、法平を蘭溪道隆とともに来日した僧侶に数える場合がある [村井 1995]。この法語は正安 2 年（1300）7 月 25 日に示されたものであり、内容からはここで言う建長和尚とは、この時に建長寺住持である一山一寧ではないかと推定されるため、法平は道隆とともに来日した僧侶ではないと考えたい。[館 2016b] にて、法平を道隆とともに来日した僧侶に数えたが、本論にて訂正する。
- 33 『律苑僧宝伝』 巻 11「来迎院月翁鏡律師伝」に「有蘭溪隆公、禪門巨匠也。師与之道契如金蘭。後帰本邦、道化益盛、緇衲奔趁。寛元年中、隆公東渡、首寓来迎院。師念其異邦之客、待之甚善」（大日仏 105・253）とあり、月翁智鏡と蘭溪道隆が中国で交流があり、蘭溪道隆が日本に来てから、月翁智鏡が泉涌寺来迎院に寓居させ、甚だ丁寧に接待したことを記している。蘭溪道隆の来日に際して月翁智鏡の招きがあったわけではない。[館 2017] 参照。
- 34 寛元 4 年（1246）6 月 8 日に建仁寺は火災で燃えており、道隆の京都滞在時には再建されておらず、また東福寺の円爾とは交流が生まれていない。
- 35 『永平広録』 巻 3「永平寺語録」に「宝治二年（戊申）三月十四日上堂。云。山僧昨年八月初三日、出山赴相州鎌倉郡、為檀那俗弟子說法。今年今月昨日帰寺、今朝陸座」（道元全 3・166）とある。
- 36 『建撕記』「蘭溪道隆宛道元書状」（諸本建撕・64-65）。本書状の詳細な訓註については、[館 2016a] 参照。
- 37 『雑談集』 巻 3「愚老述懐」に「建長寺建立シ、唐僧渡り如唐国、禪院ノ作法盛ナル事、併ラ彼（時頼）興行也」（雑談集・118）とある。
- 38 『雑談集』 巻 8 に「コトニ隆老、唐僧ニテ、建長寺、如宋朝ノ作法、行ハレシヨリ後、天下ニ禪院ノ作法流布セリ。時ノ至ルナルベシ」（雑談集・257）

とある。

- 39 京都国立博物館寄託所蔵「蘭溪道隆宛円爾書状」（禪墨拾日・22）に「仍仰
忝無碍之慈、春間修刺、申起居、便沐回報」とある。
- 40 『聖一国師年譜』建長元年条に「平元帥時頼〈最明寺殿〉關巨福山、胤建長
寺。師遣僧十員、行叢林礼」（大日仏 95・137）とある。
- 41 京都国立博物館寄託所蔵「蘭溪道隆宛円爾書状」（禪墨拾日・22）に「径山
座下随衆、六々時与足下同处。蓋千万衆中、永隔清談」とある。
- 42 『聖一国師年譜』建長元年条に「隆与師書疏往徠、数数不絶」（大日仏 95・
137）とある。また、[今枝 1979] も参照。
- 43 『異国日記』所収「円爾宛蘭溪道隆書状」（『異国日記一金地院崇伝外交文書
集成影印本』、異国日記刊行会編、東京美術、1988）に「以佳茗為贖」とあ
り、『聖一和尚語録』「偈頌」に「和蘭溪送笋韻」（大正蔵 80・21b）が収録
される。
- 44 『元亨釈書』巻 6「釈普寧」に「釈普寧、号兀庵。宋国西蜀人也。幼年祝髮
負笈於唯識之講肆、歷数歳捨去出峽而南詢遍歴諸老」（大日仏 101・212）と
ある。普寧の伝記としては、『元亨釈書』巻 6「釈普寧」と『兀庵和尚語録』
と『東巖安禪師行実』の中に記された普寧の記事の 3 つが基本的な史料と
して知られるが、『東巖安禪師行実』は、特に普寧の記事については内容に
かなりの問題があると判断されるため、本論では普寧の伝記の考察には用
いていない。
- 45 「径山道聚之義」は、後述する普寧と円爾の「径山師席義聚」（続蔵 123・5a）
を踏まえたものと考えられるが、「日域法眷・道旧郷人」に掛かっているた
め、普寧と道隆の径山での交流と、普寧と円爾との「義聚」を合わせた形
で「径山道聚之義」と表現したものと考えられる。
- 46 『聖一国師語録』仁治三年条、寛元元年条、寛元二年条（大日仏 95・134-
136）に、円爾が師範に手紙を書き、その返信の内容が録される。
- 47 「無準師範墨蹟（板渡の墨蹟）」（禪墨乾・12）、『聖一国師年譜』仁治三年条
（大日仏 95・135）参照。ただし、円爾の伝記では材木は喜捨として扱われ
ているが、綱首たちは材木の代価三万貫を径山に請求していたことが指摘
されている [榎本 2008]。
- 48 『元亨釈書』巻 6「釈普寧」に、「偶本朝道旧、講五峯之法義。屢附商舶時
聘招」（大日仏 101・213）とあるのが参考になる。
- 49 『聖一国師年譜』建長 7 年条に「恵西巖來書」（大日仏 95・138）とあり、西

巖了恵から書状が届いているし、円爾は藤原実経（1223-1284）に勤めて、実経が書写した法華経などの經典を径山正統院に納め、時に天童山住持を勤めていた西巖了恵が「日本国丞相藤原公捨経之記」（大日仏 95・139）を記している。もちろん、円爾の依頼によるものであろう。このように、円爾と西巖了恵との交流は、師範の寂後も続いていた。

- 50 栄西の入滅日と入滅地については、7月5日の京都建仁寺と、6月5日の鎌倉寿福寺の二説があったが、近年に7月5日の京都建仁寺での入滅で確定した。詳しくは、[館 2009] を参照。
- 51 博多聖福寺の歴住については、天文 24 年（1555）の一乱で無くなってしまった「住持代々自筆之記録」を、聖福寺百五世の願賢碩鼎（1481-1567）が新しく作成したものである「扶桑最初禅窟安国山聖福禅寺住持代々自筆之記録」（『聖福寺通史』、聖福寺、1995）しか残っていない。歴住の中に円爾は含まれていないが、住持期間が極端に短かったために歴住として記されなかった可能性も想定される。
- 52 『元亨釈書』巻 6「釈普寧」に「寧未来朝之前二年、平副帥夢一僧慈相巖順。教日、公勤参禅。覚後絵所夢像供養。及見寧与夢像無少差。是以敬嚮無比」（大日仏 101・213）とあるのが参考になる。
- 53 この点、時頼が普寧から印可証明を受けた後のこととして、『元庵和尚語録』巻中「建長寺語録」に「最明夢一善知識、教訓堅固参禅、惺後親絵供養、越兩年値老僧到。先来参礼。果与夢見一同。契悟後、捧呈所画頂相求讚」（続蔵 123・12c）が残されてる。
- 54 『元庵和尚語録』巻中「建長寺語録」「最明寺殿悟道後、師贈之助道頌五首」の第一首に「老僧初到与三拳、埋恨胸中結此冤。痛恨忽消開正眼、方知吾不妄宣伝」（続蔵 123・12b）が収録されている。普寧にとってもこのことは強く印象に残っていたようである。
- 55 『希叟和尚語録』巻 1「日本温英二禅人、持建長蘭溪和尚書、与平元帥求語」（続蔵 122・89a）、『希叟和尚広録』巻 4「示日本平将軍法語」（続蔵 122・129a）。
- 56 『石溪和尚語録』巻上「径山万寿寺語録」「日本僧馳本国丞相問道書至」（続蔵 123・43c）、『石溪和尚語録』巻下「偈頌」「寄日本国相模平将軍」（続蔵 123・64b）による。また、『無象和尚行状記』「宝祐二年甲寅、在仏海師之衣裡、与仏源禅師聚首説家裡事、事見于石橋頌軸序、此時平将軍時頼之請簡至矣」（続群 9 上・367）とある。

- 57 北条時頼の石溪心月招聘計画については、[葉貫 1993] も参照。
- 58 『兀庵和尚語録』巻2「建長寺語録」の入院上堂で、問答にて「進云、只如大檀那国公殿、特加礼請、和尚開堂演法。和尚数次啓筭力辞、復進十五偈控免。因甚究竟辞免不得」(統藏 123・8d) との質問を受けている。普寧は時頼からの建長寺住持就任への強い要望を何度も断ったが、最終的に断り切れなくなったのである。
- 59 普寧は日本語を話せなかったし、説法は中国語で行なった。後に来日する大休正念などは、そもそも説法は中国語で行なうという気持ちが強かったらしく、「一味説唐言」(大日仏 96・153) や「説法不改唐音」(大日仏 96・141) として、ひたすら中国語を用いて、説法でも唐音を改めることがなかったという。一方、蘭溪道隆については、後年は日本語も話せたとみられる [館 2014a]。大休正念の表現は、あるいは蘭溪道隆の状況を踏まえたものかもしれない。
- 60 この情報は京都にも届けられたようで、円爾は「和元菴印最明平元帥韻」(『聖一国師語録』「偈頌」、大正蔵 80・21b) を残しており、また、時頼は道隆にこれまでの指導に感謝する書状「相州禪門送蘭溪書」(『金沢文庫古文書』仏事編、「伝記勘文」紙背、320 頁) を送っている。しかしながら、この件に関する道隆側の記録は残っていない。
- 61 例えば、『知覚普明国師語録』巻3「陞座下」に収録される、室町幕府二代将軍・足利義詮(1330-1367)の小祥忌陞座法語で、春屋妙葩(1311-1388)は「於茲鎌倉最明寺殿平公宿習開發、得旨於兀庵和尚、爾來大關禪苑定天下五山」(大正蔵 80・666c) と評している。
- 62 日本における禪師号の嚆矢は、『元亨釈書』巻6「釈道隆」に「府奏乞諡賜大覚禪師。本朝禪師之号始于隆也」(大日仏 101・211) とあるように、蘭溪道隆の「大覚禪師」である。普寧の「宗覚禪師」については、日本で諡された形跡がみられないため、宋地での勅諡と考えられる。東巖恵安開山の正伝寺所蔵「兀庵普寧頂相」には、普寧の自筆で「宗覚禪師普寧」とあるので、生前に諡されたとみられるが、何時であったのかは不明である。
- 63 兀庵普寧から無学祖元の間には、著名な渡来禪者として大休正念がいるが、正念の記録には鎌倉幕府からの招聘であることを示す記録は残っていない。正念については、別の機会に改めて論じたい。
- 64 文応元年(1260)に兀庵普寧が建長寺に入った頃、時頼に道隆に対する「良からざる者」の「讒言」があったらしく、(川口市長徳寺所蔵『大覚禪師語

録掌故』「蘭溪道隆書状写」、道隆は厳しい状況に追いやられていったらしい。結局、道隆は京都建仁寺に遷り、普寧の帰国後は、道隆は再び建長寺の住持として鎌倉に戻る。しかしながら、再び「流言する者」（『元亨釈書』巻6「釈道隆」、大日仏101・211）があり、結果として鎌倉を離れて、甲州、信州、奥州松島などにも足を運ぶこととなった。最終的に鎌倉に戻ってきたのは入滅する前年で、建長寺に三住するのは入滅の数ヶ月前であった。『元亨釈書』巻6「釈道隆」には「偶罹于讒誣而狎于羯獠」「又還相主龜谷山。六群之徒謗吻未合、再成甲行」（大日仏101・211）とある。のちに、道隆法孫の寂室元光（1290-1367）は、『寂室和尚語録』上「仏祖賛」「大覚禪師」において、「邪徒妬害、累百流支」（大正蔵81・113b）と述べているが、道隆の時代は決して来日禅僧が安定的に布教できたわけではなかったのである。